コメント

松沢裕作

廣木尚、吉川リサ両氏の報告は、それぞれ黒板勝美という歴史家個人をとりあげながら、厳しい問題意識に立脚して史学史研究および歴史学のあり方に対峙する、緊張感に満ちた報告であった。

両報告に共通しているのは、国史学という営為の「卓越性」を求めて運動する黒板勝美の姿である。それは学問内的には「科学性」の追求としてあらわれ、学問外的には、国体論的な言説と歴史研究を整合させ、国体論を学問として正当化し、また学問を国体論によって正当化しようとした路線、ということになろう。

廣木報告でもあるように、黒板のこうした活動として最初に注目されたのは、史蹟保存活動への関与であった。高木博志氏らによって先鞭をつけられ[1]、その潮流の現在における到達点が斎藤智志氏[2]の研究ということになろう。

これらから、吉川報告の表現に従えば、国家権力の弾圧を避け「黙々と史料集めと考証に専念」したアカデミズム史学、という「大久保史学史」観にはおさまらない歴史家としての黒板勝美像が解明され、さらにはアカデミズム史学自体の政治性が問われるようになってきた。

廣木氏のこれまでの研究は、それを、黒板の研究そのもの、それも主著たる『国史の研究』に切り込むことによって解明しようとしたものであり[3]、本シンポジウムの報告はそうした廣木氏の研究を改めて史学史研究の中に位置づけようとしたものであった。また吉川報告は、黒板の、史蹟保存にとどまらない社会的活動の総体が、日本の「国史学」の存立にとってどのような意味があったのかを明らかにしたもの、と位置付けることができよう。

その上で、両報告者に私が投げかけたい中心的な問いは、「黒板勝美を研究することによって、近代日本の歴史学について、何がわかるようになるのか?」ということである。もう少し敷衍するならば、「黒板勝美は、東京帝国大学を中心とする「アカデミズム史学」をどの程度「代表」しているのか」という問いになるだろう（なお、私は、「アカデミズム史学」という用語を、帝国大学を頂点として整備された近代日本の高等教育機関に対応して形成された歴史家の集団およびその営為であり、サブシステムとして史料編纂事業をもつもの、という意味で用いる）。

誤解を避けるためにいえば、私は、なにも黒板勝美はアカデミズム史学のなかで例外的な存在であり、アカデミズム史学を代表させることはできないとか、一人の歴史家のみをとりあげることにどのような意味があるのか、といったようなことを指摘したいわけではない。ここで問いかけたいのは、黒板の活動を通じて見えてくるアカデミズム史学の特質とは何なのか、ということである。

このようなことを問題にするのには、以下のような危惧の念がある。廣木報告において指摘されていたように、黒板勝美の活動は、他のアカデミズム史家と比較すれば非常に華々しく、目立つものである。両報告

を通じ、私は、黒板という歴史家は、アカデミズム史学のもっとも外側にあって、外部に対しアカデミズム史学を代表する人物なのではないかという印象を受けた。その黒板への注目によって、黒板が外部に向かってプレゼンテーションしようとした国史学のイメージに、逆に史学史家が引きずられることを招きはしないか。

吉川報告は、黒板に代表される近代日本の「第二世代」の歴史家たちの社会的活動、より具体的には「大日本帝国の思想的建設への積極的関与」によって、今日の日本史学の基礎が築かれた以上、戦前のアカデミズムも今日の日本史学もイノセントではないのだ、と指摘する。これは一見すれば日本の歴史学に対する非常に厳しい断罪のようにみえる。しかし、果たしてイノセントでないのは、日本史学が黒板らの「汚れた」活動に支えられていたからだけなのであろうか。同時代人が黒板の活動によって国史学という営為に社会的承認を与えたように、ここでも黒板は一種の遮蔽幕として機能し、その遮蔽幕の内側にある国史学という営為そのものの性格を問わずに済ます結果には陥らないであろうか。

以下、この問題に関する疑問を、それぞれの報告に即して展開してみたい。

まず、廣木報告について。史学史の研究史上においては、国体論と「アカデミズム史学の重なりをどの程度とみるかが一つの評価軸になってきたように思われる。例えば池田智文氏の研究[4]のように、アカデミズム史学総体が国体論とぴったりと重なり合っていると理解するような見解が一方にあり、また永原慶二氏[5]のように、アカデミズム史学のいわば「最良の部分」を国体論から区別して、むしろアジア太平洋戦争後に継承されるものとし、それとマルクス主義の最良の部分の合流として戦後歴史学を描く見解がある。

廣木氏の以前の研究においては、戦前日本の公的な言論活動の大多数は、多かれ少なかれ国体論的な性格をもつ「国体論的公共性」の内側にあることを前提に、黒板の研究がそうした「国体論的公共性」のなかで、学知としての国史学の卓越を証明しようとする試みであったことを論証したものであった。こうした黒板の位置を、廣木氏はアカデミズム史学総体について当てはまるものと考えているのか、それともアカデミズム史学のなかで黒板がそうした役割を担っていたと考えるのか、という問いは、史学史研究の潮流のなかで黒板研究を位置付けようとした本報告においては課題として残されていたように思われる。

次に吉川報告について。本報告で非常に興味深かったのは、それなりのリソースを必要とする事業としての国史学が、資金やコネクションを必要としており、黒板はそれを調達してくる人物だったということである。ここで生じる疑問は、そこまでしてリソースを投入しなければいけない、近代日本にとっての「国史学」というプロジェクトは一体何であったのか、という問いである。

一般論として、国民国家形成が、記憶の共有や歴史の創造といった要素を必要とする、ということは理解可能である。しかし、アカデミズム史学がその根幹として維持し続けた、史料編纂掛—史料編纂所の『大日本史料』『大日本古文書』編纂というプロジェクトは、どのような経路で日本の国民国家形成に貢献したのであろうか[6]。ここでもやはり、黒板という「遮蔽幕」によって、その内側がブラックボックス化している恐れはないだろうか。

この点とかかわって問題となるのは、長谷川亮一氏が詳細に解明したアジア太平洋戦争期の文部省を中心とした歴史編纂事業である[7]。吉川報告では、黒板が病に倒れることなく戦時期まで活動を続けていれば、アカデミズム史学がイノセントであったとは戦後主張できなかったのではないか、と指摘される。しかし、長谷川氏が解明したように、戦時期の

歴史公定化の動きのなかには、龍粛、辻善之助といったアカデミズム史学の有力者が関与していた。それにもかかわらず戦後責任を問われたのは（板沢武雄を除き）彼らではなく、彼らから距離のあった平泉澄であった。アカデミズム史学を巡る戦前―戦後の問題は、黒板の活動時期の問題には還元できないように私には思われる。

いずれにせよ、思想弾圧の歴史や戦後歴史学の源流さがしとしてのみ書かれる史学史からは、アカデミズム史学の営為はこぼれ落ちる。両報告は、そうした目的から自由になった史学史にとって、アカデミズム史学の史学史的研究が、未開拓の課題に満ちた領域であることを改めて示すものであったといえよう。

注

（1）高木博志『近代天皇制の文化史的研究』（校倉書房、一九九七年）。

（2）斎藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』（法政大学出版局、二〇一五年）

（3）廣木尚「黒板勝美の通史叙述」（『日本史研究』六二四、二〇一四年）。

（4）池田智文「「南北朝正閏問題」再考」（『日本史研究』五二八、二〇〇六年）

（5）永原慶二『20世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、二〇〇三年）

（6）ここから、マーガレット・メールは結局日本のアカデミズム史学は国民国家形成に寄与することに失敗したと結論付ける。Margaret Mehl, *History and the State in Nineteenth Century Japan*, Macmillan Press, 1998.

（7）長谷川亮一『「皇国史観」という問題』（白澤社、二〇〇八年）